夷齋風雅

石川淳

集英社

夷齋風雅　定価　一二〇〇円

一九八八年四月三〇日　第一刷発行
一九八八年五月三〇日　第二刷発行

著　者　石川淳
発行者　堀内末男
発行所　株式会社　集英社
東京都千代田区一ッ橋二―五―一〇
郵便番号　一〇一―五〇
電話　出版部（〇三）三二三〇―六一〇〇
販売部（〇三）三二三〇―六二七一
製作課（〇三）三二三〇―六八〇〇
印刷所　大日本法令印刷株式会社

乱丁・落丁本が万一ございましたら小社製作課宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取替え致します。本書の内容の一部または全部を無断で複写、複製、転載することを禁じます。

© 1988 I. ISHIKAWA　Printed in Japan　ISBN4-08-772646-0 C0095

忘言

石川淳

荘子外物篇に、筌い魚ヲ在フル所以、魚ヲ得テ筌ヲ忘ル、蹄ハ兎ヲ在フル所以、兎ヲ得テ蹄ヲ忘ルとある。この譬はわかりやすい。魚だの兎だのを食って、いかにしてそれを捕へたか、ワナの仕掛を氣にするにとどまらない。しかし、すぐにつづけて、言ハ意ヲ在フル所以、意ヲ得テ言ヲ忘ルとあるのはどうか。忘筌忘蹄と調子よくたたみかけて来たのに釣られて、忘言もすぐにわかったといへるだらうか。これはものの譬ではない。たちまち本題である。魚兎と同様に意を生捕にしたあとでは、ワナの仕掛と同様に言は捨ててかへりみないのださうである。それでは言の立瀬があるまい。ここはいささか荘子にさからふことにする。

魚の骨のどにつかへて味知らず

これは川柳のつもり。しことばをしつて

初出誌「すばる（昴）」

夷齋風雅　自昭和五八年一月号　至一二月号

續夷齋風雅　自昭和六一年一月号　至一二月号

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

夷齋風雅

忘言　九
金澤　一三
趣向　一八
déjà vu　二四
いのちはみじかし　二九
才覺　三三
物くれること　三九
心中　四四
儒は俗か　四八
狐　五四
ばけもの　五八
神崎與五郎　六四

續夷齋風雅

神仙　七一
たばこ　七八
彗星　八四
雅俗　九〇
養老　九八
偽書　一〇六
旅　一一四
おらんだ咄　一二一
苦樂　一二七
古書　一三四
夙慧　一四〇
蓼太の句その他　一四八

夷齋風雅

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

夷齋風雅

忘言

莊子外物篇に、荃ハ魚ヲ在フル所以、魚ヲ得テ荃ヲ忘ル、蹄ハ兎ヲ在フル所以、兎ヲ得テ蹄ヲ忘ルとある。この譬はわかりやすい。魚だの兎だのを食つて、いかにしてそれを捕へたか、ワナの仕掛を氣にすることはない。しかし、すぐにつづけて、言ハ意ヲ在フル所以、意ヲ得テ言ヲ忘ルとあるのはどうか。忘荃忘蹄と調子よくたたみかけて來たのに釣られて、忘言もすぐにわかつたといへるだらうか。これはものの譬ではない。たちまち本題である。魚兎と同樣に意を生捕にしたあとでは、ワナの仕掛と同樣に言は捨ててかへりみ

ないのださうである。それでは言の立瀨があるまい。ここはいささか莊子にさからふことにする。

魚の骨のどにつかへて味知らず

これは川柳のつもり。もしことばをもつて捕へたものが人生の眞實とか宇宙の神祕とかに係るとすれば、それこそ非常のことばである。ことばはワナの仕掛と似たやうな道具にしても、ただこの道具は生きてゐる。(はじめから死んだも同然のやつは取りあげない。)生きたことばはいまだ知られざるものを捕へようとする。意と言とは緊張關係にある。法則が見つかれば方法はどうでもよいとはいへないだらう。この方法は出來合のものは使へない。兎を捕るワナとはたちがちがふ。ワナはいつも新案を作らなくてはならない。さういつても、元來莊子では意は言を超えたところにあつた。意を捕へるのに、魚何匹兎何匹とおなじ仕掛にはなつてゐない。魚だの兎だの

はワナを超えることはできないだらうが、意は天外を翔けてゐる。天道篇に、意ノ隨フトコロノモノハ言ヲ以テ傳フベカラズといふ。夢の中の胡蝶のやうに、道は雲間にひらひらして捕へがたい。

莊周は夢を說いてはだますやつ

意は言にケジメをくはせる。このあたりから、莊子は禪じみて來て、不立文字にかたむく。禪では、よく出る咄だが、擊竹の音を聞いて頓悟したといふ。すでにサトリをひらいてしまへば竹も鍬も無用だらう。しかし、擊竹の音は耳にひびいて永く消えまい。後の禪にさきんじて、莊子には忘言の聲がひびいてゐる。その聲を聞くためには、全篇にわたつて遺されたことばの細道をたどるほかない。たどりついて、よく意を捕へるかどうか。それを捕へたとおもつたときは、ことばを忘れるといふ約束になつてゐる。そこまでにはまだあひだがある。しばらくはことばの世界である。魚はをどる。兎

は跳ねる。胡蝶は舞ふ。夢の中でもぼんやりしてゐられない。後人はことばの仕掛をもつて逃げるものを追ひもとめる。うつつなきあそび。莊子はことばの遊戯の本でもある。

ことばの世界に踏みとどまるのは、なにをかくさう、當方が賣文の徒だからである。莊周は文を書くことを商賣にしてゐなかつた。この師匠はことばを忘れてのんびり悟ることができた。しやれた身分である。しやれたやつは、しやれをもつてこれを追へ。後人はサトリを忘れてことばの仕掛にあそぶことができる。それでも、忘言の聲が消えたわけではない。このいざなひは酒よりもつよい。ことばにあそびながら、うつかりことばを忘れかねないだらう。これは危險なワナである。

悟つてはできぬ商賣因果なり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com